

コラム人生課長の独り言～一歩進めるためのヒント～

子どもに何を聞くか？

私がかつて担当していた国立教育政策研究所の魅力ある学校づくりでは、RV-PDCAのための児童生徒アンケートは、次の4問だけでした。

- ①学校は楽しい ②みんなで何かをするのは楽しい
- ③授業に主体的に取り組んでいる ④授業はよく分かる

4問で十分、逆に詳細に聞くほど実態は掴みにくくなるという考えです。その内容は子ども達の学校生活の大部分であり重要な要素である人間関係に関する質問が2問、学習に関するものが2問で、非常に曖昧（ざっくりと？）聞いています。かつての私もそうだったのですが、アンケートをする際は、場面など細かく分けて詳しく調べようとしていました。結果、全体の質問数も増えがちに。たくさんの質問で細かく分けて聞けば聞くほど、回答はバラつき、全体としての傾向はぼんやりしてしまっていたなあと思うのです。一例を上げると、算数は好きだけど、国語は苦手とか、その逆、あるいはどちらも嫌いだけど体育は好きなど、子ども達の授業に対する印象はまちまちなので、教科や場面を分けて聞けば、回答は散らばってしまい、学校の授業全体への印象は捉えにくくなります。

分析側にとっても、ある程度は解釈の余地を残した方が、「これってどういう事だろう？」と考えなければいけないので、結果だけ見て、ふーん、そうなんだあで終わらないという効果もあるような気がします。国研の研究の場合も②の質問は、1学期から2学期にかけては上がるのですが多くの学校では3学期は下がる傾向にありました。それは学校行事では、みんなで取り組む場がたくさんあるけど、行事が少ない3学期、つまり普段の授業では協働的な学習が十分ではない（少なくとも子ども達はそう感じている）と解釈できることになります。この解釈が授業改善につながるのです。児童生徒へのアンケートは、取組の評価（ゴール）という意味以上に次の取組のためのリサーチ（スタート）のために行うのだという位置付けが大切だということです。（高橋）



Vol.15

発行日 令和7年11月

岡山県教育庁人権教育・生徒指導課

生徒指導

Leaflet @ OKAYAMA

リーフ

誰一人取り残されない岡山県の教育に向けて

「子どもの声」に基づく RV-PDCAのススメ②

前号では、子ども達の学校生活についての認識を学校の教育活動の改善にどのようにつなげていくか？「子どもの声」に耳を傾けることの大切さ、得られた回答（データ）の見方についてお話ししました。

今回は、データからどのように取組を展開するか？RV-PDCAの進め方を中心に解説します。

岡山県教育庁
人権教育・生徒指導課

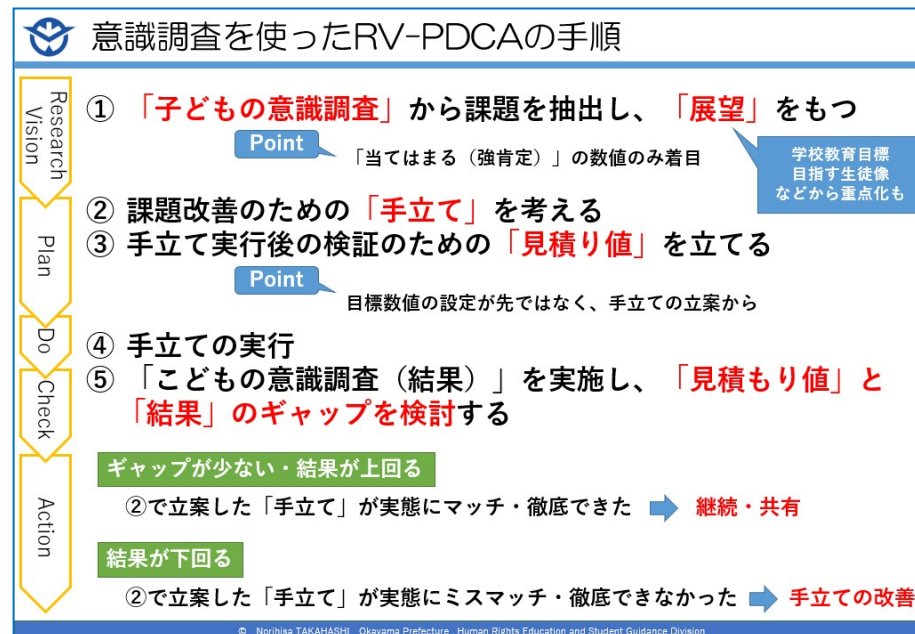
〒700-8570
岡山県岡山市北区内山下2-4-6
Tel:086-226-7589 Fax:086-224-2134

Q. 学校評価アンケートを検討し、取組を立案する際のポイントがありますか？

今回は、より実践に踏み込んでいきたいと思います。そこでオススメするのが、「RV-PDCA」という手法【下図】です。これは、皆さんよくご存じのPDCA（Plan-Do-Check-Action）のサイクルに、①Research（リサーチ）と②Vision（ビジョン）がついたものになります。①については、前回お話しした子どもの意見（声）に注目するアンケート調査などの実施と分析に当たりますが、②は、アンケート項目のどれを改善するか？つまり、どこに取組を焦点化するか？という「重点項目」を設定することが当たります。「あれもこれも」は現実的ではありません。また、「各学年（クラス）の実態に応じて」という方法もとりがちですが、一見して教師の自主性に委ねているように見える、この方法では学校組織としての取組という点では、やや弱い。もっと言うと、社会的手抜き（集団で作業する際に、個人が一人で作業する時よりも努力を惜しむ心理現象）によるフリーライダーが生まれかねません。

手立てを立案する
前提を整える

まず、手立て（具
体的な改善方策）
を考える



改善策の立案→「見積り値」設定の順番で

現在では数値目標に基づく管理が様々な分野で導入されています。今回の検証もまさにこの数値によるPDCAサイクルを活用したものですが、少し違うのは、その数値目標の立て方（順番）です。

例えば、「今、30%だから、せめて50%は目指したい」と考え立てる目標数値は「希望値」と言います。そうやって欲しいという希望が理由の数値で、多くの場合、根拠のはっきりしない数値と言えるでしょう。この方法では、希望値を立てた後で、その達成のための手立て（方法）を考えるという順序になります。

そういう目標設定ではなく、まず最初に改善のための具体的な手立て、例えば、良く分かる授業にするための目当ての設定の仕方や毎時間の振り返りの仕方を改善する、その時間の確実な確保のための授業中のタイムマネジメントの仕方を工夫するなど、実行性の高い方法を検討した上で、「この手立てを確実に実行したら、現状の30%が50%になるであろう」という順序で目標値（＝見積り値）を設定すると方法を取ります。

「何が違うんだ！」という声が聞こえてきそうですね。実は実行される手立てはほとんど違いはないと思います。目標数値そのものも同じかもしれません。しかしながら、次のアンケート結果を踏まえた後、とりわけ結果が芳しくなかった時の取り組み方には大きな差が生じます。

「希望値」を元にした取組の場合、上手くいかなかった原因をどこに求めがちになるかと言えば、例えば、「そもそも50%という目標が高すぎたんだ。次回は45%を目指そう」と目標値の修正（下方修正）に作用し、取組自体の良し悪しには意識が向きにくくなりがちです。一方、「見積り値」の場合はそもそもその根拠となる手立てが子どもの実態に合っていなかったか、何らかの理由で徹底できなかったことが、達成できなかった原因と捉えることができますので、修正すべきは目標値ではなく、取組内容（手立て）の方に視点が当たります。少し分かりにくいお話になってしまったかもしれませんが、これから本格化する来年度の教育課程編成に向けた学校自己評価を考えるヒントの1つになれば幸いです。

POINT

- 見つかった課題から、焦点化すべきポイントを共通理解する。
- 目標値の設定の仕方が、次の改善サイクルに影響を与える。



『提要』のダウンロード
はコチラ

実践という根拠に
基づいた目標値
（見積り値）